

2009年12月28日

2009年度「緑の回廊」推進計画実施報告書  
対象地域：ギニア共和国ボッソウ・ニンバ地域  
(京都大学霊長類研究所 松沢哲郎)

ギニア共和国ボッソウ村には、チンパンジーがすんでいる。群れの構成は、これまで20個体前後で安定していた。しかし、2003年の呼吸器感染症の流行により、12個体まで減少してしまった。2009年11月18日に1個体が誕生し、現在では14個体まで回復したが、危機的な状況であることに変わりはない。本来、野生チンパンジーはメスが性成熟に達すると、生まれた群れを出て、他の群れに移出する。ボッソウではこれまでに移入してきたメスが1976年の調査開始以降確認されておらず、高齢化も進んでいる。ボッソウから東方向に目を向けると、幅4kmのサバンナを隔てて、ニンバ山がそびえる。ニンバ山は世界自然遺産であり、チンパンジーの生息も確認されている。そこで、サバンナに植林を施すことでボッソウとニンバに生息するチンパンジーの交流を促そうと考えた。

「緑の回廊」計画は1997年より実施しており、一部で森林の再生に成功している。一方で、サバンナ中央部では非常に強い日射により、植えかえ直後に枯れてしまうことが多かった。2007年より新しいころみとして、サバンナに東屋をたてて、そこに苗木を丁寧に移植する方法を取り入れた。苗床同様に適度な日射を保ち、苗木が定着するまで丁寧に守ることを目的としている。東屋の素材は竹やヤシの葉など現地できりかえし入手可能で環境への負荷が少ないものを利用している。昨年度までの経過観察において、サバンナ中央部であっても苗木は東屋のもとで枯れることなく良好に成長していた。東屋は飛び石方式で小さな森を数多く作っていくのに有効だろう。本年度は乾季と雨季の2度にわたり、東屋を新たに設置した。また、過去に設置した東屋についてもメンテナンスをおこなった。

2009年12月現在、24個の東屋がパッチ状に点在している。東屋は苗木を保護するだけでなく、ハルンガナなどの自然な発芽にとっても有効なようだ。植林に用いる苗木はこれまで乾期に開始してきたが、今年度は雨期にもおこなった。雨期に実をつける種も植林に今後利用していきたい。サバンナは北部の村までのびており、たびたび野火の危険性にさらされる。防火帯を設置し、2名のパトロールを昨年引き続き配置している。また、現存の森林における罾猟等のパトロールも1名のアシスタントによって継続されている。このような活動は、なによりも地域住民の方々の理解が不可欠だ。小学校への支援を継続しているのに加え、作成したパンフレットの配布やビデオの上映会などを利用して環境教育に努めている。なお、GRASP-Japanの寄付金使途については別表にまとめた。



2009 年度会計報告（「緑の回廊」推進計画）

収入	合計
GRASP-Japan 保護活動資金 (前年度繰越金)	328,390
収入合計	328,390

支出	合計
燃料費(ガソリン、軽油)	93,280
緑の回廊、植林作業代	69,560
苗木準備費用	39,500
修繕費、消耗品費	2,560
次年度繰越金	123,490
支出合計	328,390

2009 年 2 月 1 日より 2009 年 12 月 10 日まで。

2009 年 12 月 11 日～2010 年 3 月 31 日は次年度まわし。